

全国自治体病院協議会雑誌「緑陰随想 2026」の投稿した内容です。ご笑読ください。

さわらびパーティー

十和田市立中央病院 事業管理者 丹野弘晃

大変ローカルな話題で恐縮ですが、毎年 5 月に開催される当院の新入職者歓迎会の名称になります。コロナ禍で中止を余儀なくされた年もありましたが、今年で 43 回目となる当院にとっては大変伝統のあるパーティーになります。現院長の 6 代前の院長である末武保政先生が始められた会であり、私の出身外科医局の大先輩でもありますので、しっかりと継続していかなければならないイベントです。

末武先生は、当院を立て直しその基盤を作ってくださった名院長ですが、映画製作などもこなす芸術的才能を併せ持つ人物であり、超一流の芸術家との交流もあったようです。その一端として、当院のシンボルとなっている世界的な彫刻家である佐藤忠良氏作の「早蕨（さわらび）の像」が、敷地内に凛々しく立



っています。(写真) 当院着任後僅か 4 年で赤字病院を黒字化し、同時に進められていた増改築事業の落成式に併せて、1980 年 5 月 10 日にその建立除幕式が

行われております。当日は、日本の道百選でもある官庁街通りの桜が満開で、しかも五月晴れの素晴らしい天候にも恵まれ、佐藤忠良氏本人も参列された大変盛大な式典となったようです。末武先生と佐藤氏との交流についての詳細は存じ上げませんが、結果として当院に佐藤氏の作品が存在しているという事実があります。ここから、表題の「さわらびパーティー」がスタートしたわけです。

さて、「さわらび（早蕨）」という言の葉についてですが、実は万葉集に収められている和歌の中に初めて確認されるようです。皆さんご承知の通り、万葉集は奈良時代末期に成立したとみられる日本に現存する最古の和歌集ですが、その中に志貴皇子（しきのみこ）が詠んだ次のような歌があります。「石（いわ）ばしる 垂水（たるみ）のうえの さわらび（早蕨）の 萌え出づる春に なりにけるかも」 その意味は、「岩をほとばしりながら、流れ落ちる滝のほとりに、若い蕨（新芽）が萌え出る春になったのだな～」と早春の情景を素直に詠んだ歌とされています。寒く厳しい冬を越え、待ちに待った春到来を喜ぶ歌で、大変人気があり名歌とされています。私自身は、新蕨が萌え出す奥入瀬溪流をイメージしてしまいます。司馬遼太郎さんという作家がおりますが、「司馬遼太郎が考えたこと」というエッセイ集の中に、彼は戦争経験者ですので、戦地に岩波文庫の万葉集を持参して繰り返し読んだことが書かれてあります。その中でこの早蕨の歌を唯一取り上げていて、「この原初の明るさをうたいあげたみごとなリズムは、死に直面したその時期に、心を常に拭き取る役目をしてくれた。」と表現しています。戦争中のすさんだ心を、常にリフレッシュしてくれていたということなのでしょう。このように、彼の大作家も取り上げている歌であるということです。覚えておいて損はないと思います。

ですから、歓迎会としてはもってこいのネーミングなのです。新しく加わってくれた職員は年齢に関係なく「さわらび」であり、当院にとっての春そのものであり、春を運んできてくれた、明るさを運んできてくれた貴重な人財というわけです。毎年、院内・院外併せて 200 名前後の参加者が集まる会ですが、「さわらび」に関することは、冒頭の私の挨拶の定番ネタになっています。末武先生も、病院を再建し、増改築を成し遂げ、さあこれから再スタートだ、との思いをこの早蕨の像に込めたのでしょう。このモニュメントは、当院の宝であり精神そのものですので、厳しい病院経営環境の今だからこそ、大切に守っていかなければならないとの決意を新たにしたところです。

2026 年 7 月 30 日